
ONE PIECE 世界を巡る

幸乃音琥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 世界を巡る

【Nコード】

N1777V

【作者名】

幸乃音琥

【あらすじ】

とある少女は気が付いたら主人公の姉に転生していた。テンプレ神様に会ったわけではなただの小娘同然の彼女にできることはなにもなく、幼馴染のエースとの楽しい日常を送るばかり。冒険譚になればいいよね的に家事を主に頑張る少女の物語。

エース少年と暮らす日々（前書き）

はじまりは、本当に唐突だったの。

平穏で退屈で——普遍的な日々は前触れもなく終わりを告げ、わたしは生まれ変わった。

生憎と中身はなーんにも変わってなかったけどね。

地球の日本に比べたらすごくおっかない世界なんだから、ちょっとくらい優遇してほしいと思っちゃうのは欲張りなのかなあ。

エース少年と暮らす日々

《東の海》^{イースト・ブルー} ゴア王国フーシャ村裏コルボ山山道にて。

さんさんと照る太陽の下、元気よく家から飛び出した少年はある程度進んだ道の途中、どこか苛立たしげに振り返った。片手に持つ鉄パイプをゆらゆら揺らし、そばかすの散った頬を歪めて舌打ちする。

「チッ、サーヤの奴まだあいつらに付き合ってたのかよ。早くしねエとおいてくぞ」

とは言いつつも、その足はこの先一歩足りとも動かず、とある人物を待つ。

どうせダダンの口を酸っぱくして言う掃除洗濯といった家事の手伝いをしているにちがいなかった。

以前その理由を聞いたところ、住まわせてもらっている申し訳なさ感謝を込めて些細なお返しをしているだけだと言う。彼にしてみれば、食糧を調達してきているだけで十分過ぎる謝礼だと思うのだが、それで納得しないのが我が兄妹だった。

くせっ毛の強い黒髪を掻き混ぜながら、目付きの悪い双眸を細めて、住家の方角を睨み据える。

そうして十分ほど過ぎた頃だろうか。小さな影がひとつ、近付いてくるのが視界に映る。

柔らかい黒髪のポニーテールを馬の尻尾のように揺らめかせ、垂れ目がちのぱっちりした瞳が彼を見つけた途端、喜色に染まる。まるで飼い主を見つけた犬みたいだ。

「エースーッ、またせちゃってごめんねー」

少女、モンキー・D・サーヤはにこにこと笑いながら、エースの許へ駆け寄った。エースはそっぽを向いてふんと鼻を鳴らした。

「すんげエまった。ダダン達なんかほつといておれとさつさと家を出ればよかったんだ。サボだって待ちくたびれてるかもしれないエぞ」
「ふふー、エースだったらヤキモチさん？ だいじょーつぶ、お弁当ならサボのぶんも含めてちゃんと用意してきたよ！」

「ちげエよ！ なんでそこで弁当が出てくるんだよ意味わかんねエ！」

背けていた顔を般若に変えて怒鳴るエースに、「えー、ちがうの？」と小首を傾げる様は、八歳らしく頭にお花畑が咲いているかのような能天気さだ。しかし吸い込まれるような奥深い眼差しが柔らかく細められ、それに見つめられるだけでエースはむず痒さに襲われ言葉に詰まった。

「つとにかく！ 今日も不良どもから金巻き上げるぞ。ほら、荷物渡せ」

「はーいつ。……ね、エース」

「なんだよ」

「ちよつとの間でいいから手え繋いで行こ？」

サーヤは右手を差し出して催促する。エースは苦々しげに顔をしかめながらもその手をとった。子供の高い体温が手の平からじわりじわりと伝わってきて、高ぶる感情が次第に落ち着いていく。

赤ん坊の頃から、血の繋がりは無いというのに、サーヤはずっとエースのそばにいた。己れの出自を知ったそのときも冷たい世論に堂々と立ち向かい、エースの荒れ狂う心境を宥め理性と感情共々納得がいくまで全力でぶつかってエース本人を諭し続けた。

（そっぴいサーヤと喧嘩したのもあのときが初めて……とゆーか、あれきりねエな）

自分の心があまりの苦痛に悲鳴をあげ制御できず、八つ当たりで思わず殴ってしまったことがある。女に手をあげるなんて最低極まりなく、すぐさま我に返って謝ろうとしたけれどその後が問題だった。

サーヤがブチ切れた。

普段穏やかな人物ほど本気で怒らしてはならないと学んだのはそのときだ。

今では笑い話にしかないが、あのとき告げられた言葉は鮮明に心に刻まれている。

——エース。エースはお父さんとお母さんが望まなきゃ生まれてこなかったんだよ。その事実にはさ、この身体に流れる血が誰の、とか関係ないんじゃないかな。大切なのは愛されて生まれてきたってことなんじゃないかな。それだけは他人の悪口も評判も関係ないよ、むしろ誇ればいいと思う。おれが生まれてきたのは両親がそう望んだからだって！

望まれて生まれたってどうしてわかる。おれは両親を他人の口か

らしか知らねエ、サーヤだってそうだろ。口ではなんとも言えるもんな。海賊王の子供っただけで世界に追われるしか道はねエ……
どうしておれは、普通に生まれてこなかったんだ。

——そうかなあ、わたしはエースがゴールド・ロジャーの息子でよかつたけどな。

なんでだよ。海賊王の息子なんていいことがひとつもねエじゃねエか。

——だってわたしエースの両親にはすっごく感謝してるんだもの、エースを生んでくれてありがとうございますって。そーじゃなきゃわたしとエースは出会わなかったし、いっぱい悩んで、悲しんで、そして笑って……全部一緒にできなかったんだろうなって。エースの両親のおかげでわたしはエースといれて幸せなんだよ。

それだけじゃ駄目なのかな、と小さく笑うサーヤは、実際涙を流していないのに、エースの目には泣いているように見えた。

おれのなかには、鬼の血が流れている。

だけどサーヤは鬼じゃなくて、ちょっとばかりしゃんちゃが過ぎたお父さんの血が流れているだけだと言う。

ただそれだけのことなんだと。

生まれてきた意味なんて、おれがおれであるための証明なんて、そんなのエース本人が見つけれ出すしかない。誰も知らないし、死ぬまで答えを探し続けるものなんだって。

（たまにそこらの大人より悟った物言いするし）

サーヤは不思議だ。

こちらを見透かすようで、包み込むような温かさを宿す双眸に映し出されるだけで、内側で燻ぶり続ける怒りや悲しみ、そして空虚な思いすべてがすんと収まりがつく。自分より数ヶ月早く生まれただけでこうなるのか、と疑問が浮かんだこともあるが、結局のところサーヤがサーヤだからだろう。彼女がいなければ今頃、父親の名に押し潰されていたにちがいない。

今だって無邪気を装ってエースの激情を和らげるべくスキンシップをはかるくらいなんなくするのだ。それくらいは長年共にしているのだからわかる。そして振り払えないし、振り払いたくない。

きゅつと繋いだ手に力をこめると、サーヤは唇を綻ばせて笑う。エースもにかつと笑い返した。

北へ抜けると大量のゴミの山が積もる場所に到着する。

無法地帯、グレイ・ターミナル不確かな物の終着駅。

日光による自然発火でいつも煙を上げるそこは常に悪臭が漂っている。

サーヤ達は往復の山道修業を課して訪れ、そこに住む親友のもと

に向かう。彼は用がなければ、大抵コルボ山と不確かな物の終着駅
中間の森にいた。

「サボ、いるか！」

エースが声を潜めて太く立派な木に呼び掛ける。

「サボ、お昼に食べるお弁当持ってきたよー、食べよーよーっ」

「サーヤ、まだその話引きずってんのかよ」

「うっん、わたしお腹空いちゃった」

「お前かよ!?」

サーヤのお腹がちょうどよいタイミングで可愛らしい音をたて、
それにエースが思わずツツコミを入れる。

最初の慎重さはどこへやら、二人がわいわい騒いでいると、頭上
からぷつと噴き出すような笑い声が聞こえてきた。

ひよいと顔を出したのは、ゴーグルを着けた黒いシルクハットを
被るひとりの少年だ。彼は心底可笑しげにくつつ喉を鳴らしなが
ら、上に登るよう顎で合図した。

「ははっ相変わらず二人並ぶと面白エなあ。エース、サーヤ、早く
のぼってこいよ」

「ほらー、サボに笑われちゃったじゃないエースったら」

「おれが悪いのかよ！　　ったくサーヤといるとどうにも調子が崩れ
る……」

エースはぶつくさ愚痴りながらも大樹をするする登り、サボの立
つ太い幹に到着する。遅れてサーヤも着いた頃には、二人は幹の内
側を削って隠した財宝を確認していた。子供には到底持ち得るはず
のない金銀財宝だ。

彼等は数年前から、不良達から奪い取ることで少しずつ貯金していた。それもこれも幼い頃より抱いた目的のためにだ。

「大分貯まってきたな。海賊船、あといくらで買えんのかな」

「さア……何千万か何億か……まだまだだ。早くしまえよ、誰に見られるかわからねエ」

「それ終わったら移動してご飯にしよう。今日はサボが好きって言ってくれた物たくさん詰めたんだ」

折り曲げた膝に頬杖をついてにこにこ笑うサーヤを、エースは軽く睨みつける。

「それっておれの好物はないのかよ」

「二人ともお肉好きじゃない。だからもちろんエースの好きな物も入ってるよ」

「そ、そうか……」

エースがふいと顔を逸らした先に、サボのにやついた顔が視界に入り込む。

「エース、おれにサーヤをとられたとでも思ったのか？ 可愛いとこあんだな」

「ちげエよバーカ！ ほらさっさと行くぞ！」

頬を赤くしても説得力は皆無に近く、肩を怒らせて移動するその背中をサーヤとサボは顔を見合わせて笑う。

こんな風にこの先ずっと三人仲良くやっていけたらいい。

そんな思いは、翌日現れた嵐によつて唐突にぶち壊された。

エース少年と暮らす日々（後書き）

2011/09/18：改稿版入替

ガープ、現る

「サーヤをフーシャ村に連れて行くぞ」

ダダン一家にいきなり訪れた台風は、快活な笑みを閃かせて言った。

この暴走機関車は血のなせる技か、ひどく自己中心的なマイワールド展開が凄まじい。本日もまた、サーヤの祖父であるモンキー・D・ガープは筋肉隆々の腕を組んで堂々と問題発言をする。

これに反対したのはもちろん、彼女と離れるなんて以っての外であるエースだった。

「ジジイツいきなり来たかと思えばサーヤを連れてくたって!? ふざけんな!」

「ルフィの奴をこれ以上ひとりにさせとくと危なっかしくてないっそのこともうひとりの孫に任せればええかと思ったんじゃ」
「ルフィって……」

サーヤの疑問にガープが途端にデレツと相好を崩して答える。

「そういえばサーヤは知らなんだか。実はお前には弟がいるんじゃ」
そのときの心境は、話を聞いていた全員が重なったにちがいない。
えええええーっ!!! と山中に山賊達の悲鳴が響き渡った。

しかしそのなかで一番冷静だったのは、当のサーヤだ。ほんの一瞬、驚いた素振りを見せるも、すぐさま胡乱な眼差しでガープをじいつと見据える。

「ちよつとおじいちゃん、そのルフィって子何歳なの？」

「五歳だな」

「わたしとは三歳違いね。……今までは誰がルフィのお世話をしてくれてたのかな？」

ガーブはふと背筋が薄ら冷たくなりピシリと腰を伸ばしていた。
発信源は目の前の孫娘からだ。

しかし理由がわからず、ハテナマークを頭に浮かべながらも真っ正直に答えた。

「わしは滅多に帰ってこんなから村の連中に任せてた。そもそもサージャはエースと同じ頃に生まれたからちようどええかと思つて一緒にダダンに預けたんじゃが」

「つまり、おじいちゃんはわたしたちみたいに弟を放つてたんだ。しかも、ひとりで」

サーヤにはエースがいて、エースにはサーヤがいた。そしてダダン一家という、ガラは悪いがお人よしの山賊と大所帯で暮らしている。

だけどルフィはひとりだ。村人達が可愛がつてくれているにしても、ひとりきりだったのだ。

父親がどこか知らない場所で悪名を轟かしていることも、実の母親が何故かいないこともすべて知っていたというのに。

——おぼろげな原作知識によって。

彼女には前世の記憶があつた。

所謂、転生というお決まりパターンだ。
女子高生で、漫画と小説が大好きで、取り柄は家事という所帯臭さしか特徴のない極々普通の一般人だった。

しかし気がついたら二次創作ワールドに放り込まれていたという罨。予想外すぎる現実に驚愕を通り越して啞然とした。神様に対面して能力をもらったわけでなし、そもそもサーヤはこんな事態を願ってなどいなかった。

それでも起きてしまったことはしょうがないと素晴らしいくらいの切り替えの早さで『ワンピース』の世界を生きている。そう思わなきゃやってられないという本音が、当初八割がた占めていたが。

（どーして気付かなかったかなー）

いくらでも思い出す機会があった。それなのによりにもよって主人公の存在自体忘れていたとか、ない。原作知識が適用されるのはまだまだ先の話なので、すっかり頭の隅に放り投げていた。

（うあああーっけどけどどーしようもないものわたしただの子供だしフーシャ村に行くわけにもいかなかったしー……うん、やっぱり全部おじいちゃんのせいだ！）

実の孫を山賊に預け、村人に預け……海軍で忙しいといっても酷い所業には変わりない。

サーヤは沸々と込み上げる怒りで頬が引き攣っていく。それを間近で目にしていたエースは、ぎくりと身体を強張らせた。

（やべエ、サーヤ切れそうだ）

トラウマとまではいかないが、精神的にぐさりとくるアレは普段

ばやんとしている相手なだけに胸を抉られる。今回は己れに矛先が向いていないだけいいけれど、とガープを睨みつけていただけの眼に同情の意が入り混じる。

「おじいちゃんは馬鹿なのね」

ズバリと、サーヤは淡々とした口調で切り出した。

「は、サーヤ？」

「馬鹿とは思ってなかったよ、天然で終わらせていたのに馬鹿だったなんて。なに自分の家族をひとさまに預けてなんにもしてないのせめて家政婦を雇うとか少しでも迷惑かけない手段を用いるとかあったのによってもってただ放置とか信じらんないわたしはいいよエースがいてダダンさん達がいて楽しいものおじいちゃんのずぼらな采配には感謝してる。けど弟に関してはひど過ぎると思うの」

息継ぎなしでの感情を乗せない罵りにガープは目を白黒させる。

周囲はどこか怯えたような気配を浮かべて怖々と見守るばかり。

「人の善意に任せるのと投げだすのとじゃ意味がちがうってわかってる？ たまに帰ってきたかと思えば迷惑しかかけてないって恥ずかしくないのかなええ恥ずかしくないんだろうねそもそも気付いてないんだもの」

正義を掲げる海軍中將の力は偉大で、数々の悪行をその堅固な拳で止めてきたことは知っているから素直に尊敬できる。海軍の英雄の名は伊達じゃない。

だけど自由奔放というべきかはたまた不器用すぎるというか、とにかく大雑把すぎる。周囲のフォローがなければこの人はどうなっていたらろうか。

（んー、どーにでもなつてそう。だつておじいちゃんてば憎めな
いんだもん。けどちょっとは自分の行動が周囲にどう影響するか考
えてほしいなあ……考えもしないんだろーなあ）

サーヤは小さく溜息をつく。そんなさやかな動作にさえびくり
と震える大柄な老人に、呆れを多分に含んだ目線を送った。

「サ、サーヤ……」

ガープの弱々しい呼びかけに対し、多少の留飲を下げたとはいえ
未だに怒り冷めやらぬサーヤはつーんと顔を逸らしてトドメの一言
を放った。

「自由奔放つて聞こえはいいけど、おじいちゃんのそーゆー馬鹿で
鈍感で唐変木なところたまにイラッとする」

「ぐふア！！？」

瀕死レベルのダメージを与えられ、心臓部分を押さえてよろめく
ガープを眺める周囲の眼差しは、とても珍しいことにえらく同情的
だった。

しかし例外はつきものである。仮親であるダダンはずアマミロと
言わんばかりの一瞥を送った。そして話に区切りがついたと判断つ
いたのかサーヤの肩を大きな手の平で軽く叩く。

「で、ガープさん結局のところサーヤを連れてくのかい。ま、あた
しにしてみりゃクソガキひとり減るからいいんだけどさア」
「あ、ああ……サーヤは連れていく」

「ッジジイイイ！！！」

エースはカツとなって飛び掛かった。

頬を狙った渾身の一撃はしかし、かわされるどころか胸倉を掴まれ勢いよく床に押し倒された。はっと呼吸が一瞬止まる。盛大に咳き込みながら、それでも覆いかぶさる男をきつく睨みつけることは止めない。

（なんで）

なんでなんでなんで。

「エース！」

「なんのつもりじゃ、エース」

「サーヤは、行か、せ、ねエ……！」

サーヤなんだ。

半身に近い存在を、目の前で奪われんとされて動かない馬鹿がいるだろうか、いやいいない。

ジジイの身勝手さは、サーヤの言う通り時折苛立たしくなる。そして今回は堪忍袋の尾までもが切れた。しかし子供の力が大人に、ましてや現役の海軍中将に敵うはずがなく、じたばたともかくことしかできない。

(悔しい)

大切な時に限ってなににもできないなんて、悔しい。
不甲斐無さと腹立たしさがぐちゃぐちゃに混ざり合い目の前が真っ赤に染まる。

「二人とも、もうやめて!!」

サーヤは悲鳴に近い声をあげて、自分の何倍もの太い腕にしがみついた。泣きそうな顔でガープを見上げて首を振るう。

「ねえ、エースも一緒じゃダメなの？ 二人でフーシャ村に行っちゃダメ？ それだったらエースもそんなに反対しないんじゃないかな」

「サーヤ、それはいかん」

「……まだ、ばれちゃう可能性があるから？」

目を見開き沈黙を肯定とした祖父に、サーヤは悲しげに睫毛を伏せて吐息をついた。

エースの父親、ゴール・D・ロジャーが処刑されて早幾年、彼の海賊王の関係者は全員例外なく地球であった魔女狩りのような状況に晒された。ガープはその最中生まれたばかりの赤ん坊だったエースを山奥に匿ったのだ。まさか実孫のサーヤまで預けるとは予想外だったが、とにかくにも有効な手段にちがいない。

エースが世界を敵に回さずに済む方法を、選べるうちは選んだ方がいい。

ロジャーに子供がいる説が未だに広がっていることを確信したサ

ーヤは、瞬時に決断した。決断するしかなかった。

「……わかった、フーシャ村に行く」

「サーヤ!？」

「けどその前にエースと二人つきりでお話したいの、いい?」

「構わん。わしらはここで待つとるから行ってこい」

色よい返事に満足したガープはあっさりとエースを解放し、ひらりと手を振った。サーヤはショックで硬直するエースの手を引いて家を出る。

その背中を見送るダダン達は、事の元凶であるジジイを常日頃感じていたよりもずっと忌ま忌ましく感じ、じとりと睨みつけた。

サーヤ達が訪れたのは、コルボ山先端、一面の海が広がる崖だった。

ここまでの距離を歩くなか二人の間に会話はなく、重い沈黙のみが場を占めていた。猛獣に出くわすルートくらい、とうに知り尽くしている二人だ。回避しようと思えば、大抵は避けられる。

空との境界が曖昧な青一色の景色に、いつもながら感嘆の溜息を零しながら振り返ったサーヤは、困った風に綺麗なカーブを描く眉を下げて問いかけた。

「エース、怒ってる?」

俯かせていた顔を上げて、怒気を露わにした様子に肩を竦めた。

「だっておじいちゃんにはどうやったところで敵わないもの、しょうがないよ」

「っしょうがないで済みますのか。お前にとっておれやサボはその程度なのかよ！」

エースが冗談では済まされない怒りを持って口を開く。

「おれはお前のそういう……やけに物分かりのいいとこ嫌いだ。なんで足掻かねエ、なんで理不尽なことに従えるんだ。おれはジジイが言う海兵なんかになりたくねエのは自由じゃねエからだ。サーヤはちがうのかよ!？」

エースには目の前の少女の考えが理解できなかった。

大した反論もせず平然と自分を置いていこうとする態度が許せなくて悔しくて悲しい。幸せそうにぽやぽや笑っている姿を横で見ているだけで満足していたけれど、逆にサーヤはエースという満たされなかったのだろうか。

（実際、サーヤはおれが連れまわさなけりや家で大人しくしてるよ
うな奴だし。けど外に出たら出たで楽しそうだから……本当は不満
とかあったのかもしんねエとか……）

そんなはずない、と理解しているのに、一度生まれた疑念が容易に内心を掻き乱す。眉間の皺ごと額を押さえて齒ぎしりをする。

心の底から吠えた嘆きがひしひしと伝わったのだらう。サーヤはさらに眉尻を下げて告げた。

「ちがわないよ。わたしも自由が好きだし、エース達といたいって思う」

「だったら！」

「けどね、エース達が海賊になりたいって資金集めしてるみたいに、わたしにだってやりたいなあって思うことがあるの。……口に出したことがなかったし、こういう機会がなかったら言うつもりなかったんだけど、ね」

ざあつと強い潮風が吹き、ポニーテールと共に耳元で揺れる髪を手で押さえる。そんなさりげなく女を感じさせる仕草を不意打ちで見せつけられたエースは、どきりと心臓が飛び跳ねた。

「エース、わたしがちよつとずついろんな本集めてきたの知ってるよね。それなんのためか考えたことある？」

「はっ。……ねエ、けど」

山賊一家の一室は、エース達が寝泊まりする子供部屋になっている。

エースは外出ばかりで寝るための場所になっっているから物をまったく置いていない。しかしサーヤは様々なことを試したがる性格からか、片隅の本棚には書物が並び、その他に用途のわからない道具が多く集められている。

あまりに一貫した嗜好がないため、一種のコレクションかと思っ
ていたのだが。

「それね、わたし自身が将来どんな道に進みたくて大丈夫なように
って準備してるの。……あ、もちろん趣味が大半だけどね、そ
うい
う意図も入ってるの」

エースは驚愕した。まさか将来を視野に入れての行動とは思っても

しなかったからだ。

顧みれば確かに、武術、医学、美容、歴史、天候……時折エースに知識の一部を披露していたが、実用的な内容ばかりだったような気がする。

サーヤは小さく笑い、海の方へと視線を投げた。

「といつても、わたしは多分海に出るんだと思う。世界中を見て回りたいの、それで色んなことを知っていけたらって。だから……ダダン一家より村にいた方が今後のためにいいかもしれないって考えたんだ。おじいちゃんはんはほんのきっかけに過ぎないんだよ、エース」

この世界の常識が前世と同じであるわけがなく、ここ数年で蓄積した知識のおおよそは身体で叩き込むものばかり。ゴア王国の徹底した貴賤主義、人間の異常なまでの強さ、色々だ。

ワンピースは強者ばかりが揃う、ある程度の力がなくてはどこにも行けないだろう圧倒的な暴力で満ち溢れた世界だ。そのことを知っていないながら、ただの一般人として暮らす選択肢は端から削除している。

なにより祖父が海軍中将で父が革命軍統率者である時点で無理だ、平穩なんてどこにもない。ある意味エースより危うい立場にいる。

（ほんと、きっかけどころかわたしは強くならなきゃエース共々早死にしちゃうんだよ）

仲良く天国行きなんて将来は考えたくもない。目指せ老後の安穩とした生活だ。

「わたしってばエース達に比べたら全然強くないでしょ？ 非力だし、かといってなにかの武道を学ぼうにもダダンのところにいたら

あまりにも手段がないんだもの。おじいちゃんに言ったら海軍行き決定になるのは目に見えてるから頼めないし、フーシャ村に行けばもしかしたらなにかあるかと思っただけ」

「……おれが守るつつつても、サーヤは納得しないよな」

「足手まといはやーよ。むしろわたしがエースを守ってみせるんだから」

両手に握りこぶしを作りヤル気十分の様子を窺わせるサーヤを視界に映し、エースは後ろ首を掻きながら深い溜息をついた。

怒りはとうに消え去り、代わりに浮かんだのは途方のない寂しさだった。前を見据えた純粋な思いを引き止めるほど野暮じゃない。しかし初めて離れて暮らすとなると、心構えがなかっただけに胸がじくじくと痛んだ。

複雑な思いすべて顔には出さず、渋々とした口調で告げる。

「なら許す。なにかあったらすぐ戻ってこい、お前を泣かす奴は全部ぶつつぶしてやる」

エースができることといえば、これくらいしかない。だけどサーヤはとても嬉しそうに笑った。

「エースってばジゴロの才能あるかもねー」

「……ジゴロってなんだ」

「ふふー、ヒ・ミ・ツ。なくてもたまに会いに行つていい？ あ、逆に会いに来てもいいよ」

「バーカ、おれは行かねエよ、お前から会いに来い。ほらさっさと戻るぞ」

道を引き返すエースの背中に、「ありがとう」と掻き消えそうなくらい小さな感謝が告げられる。エース聞こえないフリをしてその

場から駆けた。

ガープ、現る（後書き）

2011/09/21：改稿版入替

ルフィとの出会い

ダダン一家に戻るとすぐさまガープに連れられて山道を下ることとなった。

前触れなく姿を現しては「修業じゃい！」と叫び修行というより拷問並みのしごきを有言実行する祖父は、今日に限ってはなりを潜めているため非常に安心だ。繋いだ手をなんとなくにブンブン振ると、孫娘が可愛いガープはデレデレしながら言った。

「サーヤはフーシャ村は初めてか」

「うん、はじめて。だからすごく楽しみー。ね、ルフィってどんな子なの？」

弟の印象を尋ねるとガープは顎を撫で摩りながら首を捻る。

「ルフィか。ルフィはなア、誰に似たのか知らんがえらく単純な奴じゃ。だが頑丈さはわし譲りじゃな！ はっはっは」

「そ、そーなんだあ」

性格もガープ譲りなのでは思ったが、賢しくも口を噤ぐ。モンキー一族にしては一般人寄りにちがいないサーヤは、きつと母親似だ。そう信じよう。信じたい。

そうしていつになく穏やかに会話を交わし、ゆっくりとしたペースで歩を進め過ぎたのか、フーシャ村に着いたのは空が茜色に染まる頃だった。

村人達は既に自宅に戻ったのか、通りはひどく閑散としている。ただど生温い風に吹かれて風車が緩やかに回り、ヤギや羊、そして牛といった動物達が飼われた小屋がぼつぼつと立ち並ぶ風景はのど

かでどこかほつとする。

（ここがフーシャ村、かぁー）

漫画越しでは背景描写をあまり気にしたことがなかったのでどのような場所が見当もつかなかったが、なかなか安穩とした田舎ではないか。サーヤは一目見たそのときから、フーシャ村を気に入った。

しばし進んだ先、ガープは酒場らしき建物に立ち寄りドアを潜る。内装は外観同様西部劇にでも出てきそうな造りをしており、店仕舞いなのか仄かな明かりを灯す薄暗い空間で年頃の女がひとり机を拭いている。カウンターでは小さな子供がジョッキになみなみ注がれた白い液体を飲んでいた。

サーヤはこの二人が何者なのかすぐに気付いた。

マキノと——ルフィだ。

原作主人公。

将来、世界中を震撼させる存在。

そう思うだけで視点が変わり、胸が激しくざわめく。しかし一方しか見ないそれはよろしくない、とすぐさま否定を重ね、改めて見遣る。

目の前にいるのは、わたしの弟だ。血の繋がりを持つ、わたしの弟。

「マキノ、帰ったぞ」

「あらガープさん、おかえりなさい」

「げっ、じいちゃん！」

ショートヘアに巻いた三角巾に長スカートのボヘミアン風の格好は、店のご洒落た雰囲気によく似合う。マキノはガープの隣に立つサーヤに目敏く気付き、驚きから口を押さえた。

「ガープさん、その子は……」

「ああ、わしの孫のサーヤじゃ」

「初めましてモンキー・D・サーヤです。祖父がご迷惑をかけているようで、本当にごめんなさい」

ぺこりとお辞儀すると、マキノは視線を合わせるように腰を屈め、につこりと微笑んだ。

「あら、しっかりした子ね。私はマキノ、この酒場の店長をしているわ」

「お前サーヤって言うのか！」

と、ミルクを飲み干したルフィが椅子から飛び降りてマキノの隣に並ぶ。

三歳年下というだけあり自分より小さな身体なのに、溢れんばかりの生命力に伴う強い意思が、サーヤの落ち着き払っていた心にまっすぐに届く。ルフィという存在が放つ原石の輝きに囚らずしも心を奪われずにはいらなかった。

（うわあ、原作主人公だからっていうフィルターなしでもなんか、うん、すっごく引きつける子だ）

生まれもった資質というやつだろうか。幼い頃からこれとは、確かに小さな村に閉じ込めておく器ではない。今はただのガキンチョでしかないけれど、大人になればさぞ魅力的な男になるだろう可能性を見出して、サーヤは思わず唇を綻ばせた。

「うん、サーヤって言うの。君の名前は？」

「おれはルフィだ。サーヤはなんでじいちゃんといるんだ？」

「ルフィ、サーヤじゃなくてお姉ちゃんよ。この子はあなたと兄弟で、ガープさんが連れてきたみたいなの」

マキノのフォローにルフィはますます不思議そうに首を傾げる。

「サーヤはおれと兄妹なのか？」

「そうじゃ。そして今日からお前はサーヤと暮らすんじゃ」

「ほんとか!？」

途端にルフィは目を輝かせ、喜色満面の笑みを浮かべた。

「ちなみにサーヤは家事全般得意じゃし、料理もうまいぞ」

「スツゲエエ！ おれ料理ができるヤツ好きだつ、よろしくなサーヤ！」

「う、うんよろしくねー」

握手を求める手を差し出され、反射的に握り返す。ここまで歓迎されて悪い気はしない。

そんな二人を微笑ましく眺めていたマキノは、ふと咎めるような目線をガープに送った。

「けどガープさん、ルフィひとりもどうかと思っていたけどサーヤちゃんも子供だし、子供二人だけで生活するのはどうなのかしら」

「問題ない。これも修業じゃい」

と、胸を張り堂々と断言するガープ。そもそも近所に村人がいるだけで十分なくらいだというのに、自分の孫達がまともな生活を送れないはずがないと思っている。マキノが言いたいのはそういうことではないのだが、生憎と意思疎通スキルが著しく低い男だった。

それはマキノもわかっているのか、肩を竦めた後にサーヤ達に声をかけた。

「二人とも、なにか困ったことがあったらいつでも来ていいからね」
「おう！ サーヤ、マキノも料理うまいんだぞ。いっつも食べさせてくれるんだ」

「そーなの？ じゃあ機会があれば食べにこようかー。マキノさん、今までルフィのお世話をしてくださって本当にありがとうございます。これからは出来る限りわたしがやりますので安心してくださいねっ」

「うふふ、そこまで畏まらなくていいわよ。それにルフィにもおすそ分けしていただけたから、お世話というほどのことなんてしていないから。サーヤちゃんも遠慮せずに頼っちゃってね」

ルフィの食生活の管理はマキノを中心に回っていたことを確認し、後日お礼の品を持って改めて訪ねることを決意する。マキノが気にしていないことも、好意に甘えてばかりではいけないのが心情だ。

（けじめは一度しっかりしないと、ズルズル甘えちゃうもの）

それにしても、こうして会話を交わしているうちにふと思い至ったのだが、実はこの世界に生まれ落ちて初めて普通の人物に会ったのではなからうか、としみじみと感じ入る。常識人と言い換えてもいい。

山賊一味に悪ガキ二人に破天荒な祖父と、サーヤの世界は見渡す限りとてつもなく狭い。この年頃で視界を広げる機会なんてそうそう訪れないことから至極当然の状況下であったが、今後交友関係が幅広くなる可能性を考えると否応なしに胸が弾む。

「強くなつてなんぼ、だねー」

「サーヤ、なんか言ったか？」

「なんでもなーい」

大人になればもつと様々なものに巡り合うことができる。そのためエースに宣言した通り、海に出ても大丈夫なくらい成長あるのみだ。

サーヤは晴れ晴れとした笑顔を閃かせ、改めて決意した。

ルフィとの出会い（後書き）

2011/10/23：改稿版入替

兄弟二人の日常風景 前篇

トントンと野菜を切るリズムカルな音が室内で鳴り響く。それに伴いフライパンで焼くジューシーな肉と柔らかくも優しいスープのなんとも食欲をそそる香りが漂うことが。仮に誰かがこの場にいれば生唾を呑み込んでいたことだろう。

これらを作り出すのは、もうすぐ九歳を迎えるサーヤだった。

薄ピンクの花柄エプロンを身につけ、鼻唄を口ずさむ姿はまるで浮かれた新妻のような初々しさを彷彿させるが、慣れきった手つきは長年家事をしてきた者のそれである。

サーヤは鍋のスープを味見し満足げに首を縦に振った。朝食の準備完了だ。

「よーっし、そろそろ起こさなきゃ」

後頭部で纏めたポニーテールを揺らめかせて、寝室に向かう。二段ベッドの上、そこから聞こえる盛大なイビキに何処か癒されつつ、サーヤは梯子をのぼり熟睡する子供の顔を覗き込む。むにやむにやとなにやら寝言を呟きながらも隣室から流れ込む香ばしいにおいを察知したのか、いつにもまして表情が緩んでいた。弟のルフイだ。

（うああー可愛いいいい）

子供ってなんでこんなにも可愛いんだろう。

ふにふにと頬を指で突き、柔らかくてすべすべな感触にますます虜になる。

「ん〜……」

さすがに弄りすぎたのか嫌そうにぐずってサーヤから背を向けたので、頃合いと見て声をかけた。

「ルフィ、ご飯だよー。お肉挟んだサンドイッチもあるよお」

「肉！……あれ、どこだ肉。あれ、サーヤ」

「ふふ、おはよー。ご飯は顔と手洗ってからね」

瞬く間に目を覚ましたルフィは、サーヤを不思議そうに眺めた後にこくんと頷く。

「わかった、そしたら食っていいんだな」

「うん、その間にテーブルにご飯運んでおくよー」

ルフィはベッドから飛び降りて颯爽と洗面所に向かった。余程お腹が空いているようだ。というより、肉の一言で覚醒する様はまさに野生児そのもの。そんな様も可愛いけれど。

サーヤも梯子から飛び降りてキッチンに戻る。

この世界は本当に不思議だ。ガス、電気、ましてや衛生などあるはずなのに、地球にいた頃となんら変わらない生活を送ることが可能となっている。携帯代わりにでんでん虫など不思議生物が山と生息しており、彼等を使用することで様々な部分が成り立っているのだ。一部の人間にしか所有不可能な物もあるが、それでも十分過ぎるほどに。そういう意味では、元地球出身のサーヤは非常に助かっている。

「メシー！」

野菜と肉を挟んだハンバーガー、薄味の卵スープ、そして色とりどりの果物をこんもり盛った食卓を目指して、きちんと言い付けを守ったルフィが目をキラキラさせて洗面所から飛び出す。毎度毎度

お馴染みの光景に小さく笑みを零して手招きした。

「いつも同じこと言うけど、わたししかないからがつつかなくていいからね。じゃあ」

そして二人向かい合わせに揃ったところでパンと手を合わせ、

「いただきます」

「いただきますーっす！」

朝の恒例となりつつある挨拶をした。

サーヤ達二人で暮らしはじめて早一ヶ月が経とうとしていた。

ガープが乗る軍艦を見送った後、近所に果物の詰め合わせを持って挨拶回りをし、ルフィの姉の存在を村人全員に知ってもらうまでは予定通り。だけどその翌日、まさかのサプライズ歓迎会が開かれていたと感激した。

原作で知っていたが、フーシャ村はとても温かくて心地良い場所だ。

古きよき時代を思い起こさせる人情味に溢れており、なにより祖父の故郷ということもあって滅多なことで危険に曝されることがない。これで血筋が限りなく黒に近いグレイゾーンじゃなければ一生

涯世界に追われるほどの危機感に襲われずに済んだのだけだ。

ワンピースの世界は命の価値観が非常に低い。

厳格な法律に適應されるのは天竜人くらいで、ただの村人が殺されたところで主に騒ぎ立てるのは周囲の人間くらいだろう。世界政府がいくら正義の看板を掲げていても、地球のように事細かな法律がなく曖昧な基準による力任せでこり押しなやり方で治めきる事など到底不可能だ。

強い意思と誇りを持って己れの道を突き進む人達が揃ってはじめ、そのような矛盾を抱え込んだ中途半端な組織でも成り立つ。仮に地球のような政治家達ばかりが政府に占めていたとしたら腐敗は進みに進み、最終的には勝手に崩壊していたにちがいない。

弱肉強食。

法律は人々のモラルの最低限の基準を与えたに過ぎない。

世界はまだまだ未知の部分が多すぎる。

まさしくその言葉を体言しているからこそ、サーヤは強さが必要なのだと感じる。

曖昧にしか覚えていない原作知識ですら、誰より優位にたてるひとつの強さだ。

最後に読んだ巻はルフィ海賊団が頂上戦争から二年後、シャボンディ諸島に集結する場面まで。

漫画ではエースが死に、白ひげという世界の均衡を保つ一角が崩れ、そして黒ひげが最強の能力を手にしたことで世界は混沌に陥る。一方、ルフィは嘆き悲しみ心が押し潰されそうな辛苦を乗り越え更なる強さを手にするのだ。

しかしこれらの展開は漫画だからこそ冷静に受け止められる内容

だ。『ルフィ海賊団のパワーアップのために必要だった』と判断できる事柄だとしても、現実となればそうもいかない。

（ルフィの高みのためにエースを犠牲にしなさい？ そんなのさせないんだから）

まったくもって馬鹿げてる。

誰が大事な幼馴染をなくす選択肢を選ぶものか。

誰が大切な弟を泣かせる選択肢を作り出すものか。

正直なところ、白ひげやら黒ひげやら世界の危機とやらは、身内が無事ならあまり気にしていない。というか現在、赤の他人である彼等に抱く感情はなにひとつない。

現実と虚構をしっかりと区別し、原作知識は未来の指針を示す参考書程度に考えておくことがベストな判断。所謂パラレルワールド、サーヤというイレギュラーな存在がいる時点で確実に波紋を呼び起こしているだろうことは自覚済みだ。

ならばサーヤが動き回るだけで、大小の違いはあれども周囲に影響を与え、未来を大幅に変化させることは可能だろうと考えている。

「だけど子供の内にできることはそうない、と」

「サーヤ、なんか言ったか？」

「うーうん、なーんにも言ってないよ」

ルフィと手を繋ぎながら歩く道のりは、かるうじて柵をたてただけの舗装されていない砂利道だ。視界の端には必ずと言っていいほどに風車が設けてあることからフーシャ村。安直な由来だけど実に覚えやすい。

太陽が真上に昇る時間帯に差し掛かり、ちらほら見かける村人が

朗らかに声をかけてくる。子供の数が少ないためか、皆に猫っ可愛がりされている兄弟である。

「やあ二人とも、今日も仲良しだねえ」

「しししっこれからサーヤと修業するんだ。それでもっともっと強くなつてじいちゃんに勝つ！」

「威勢がいいねえ。ま、頑張りな」

からから笑いながらルフィの決意を流す大人達の大半は、所詮子供の戯れ事だと思っているにちがいない。それでいい。常識の範疇外へと進む気満々であることは、サーヤ達自身が知っていればいい。

目的地は村から少し離れた平地だった。海辺の近くで、誰にも邪魔されない修行場を探し求め定めた場所だ。

ルフィは早速軽くストレッチをはじめ、サーヤは修業場に放置している木刀片手に持つてきた本を地面に置いて無造作にページをめくる。このような光景はなにも珍しくなく、二人が修業をはじめてから毎度行われていることだった。

ルフィは基礎体力をつけるため筋トレをし、サーヤは本の知識をもとに己れの武器を目下模索中である。ルフィはまだ赤髪海賊団というきっかけがないため、海賊に憧れていないどころかなりたいとさえ叫んでいない。

ただしガープの強要地獄コースで幾度も辛苦を味わった影響により、強くなりたいとは本気で思っているようだ。ちなみに海軍の良さはまったく伝わってこないという、着実に祖父の思惑から外れる結果へと進んでいることは間違いない。

「んー、やつぱり独学には限界があるかなあ。とゆーか某狩人漫画の裏試験みたい」

「サーヤ、本ばっか読んでるけどなんかあんのか？」

「なんかねーすつごく強くなるためのスパイス的なものがあつて探してみてるんだけど、どれにも書いてないなーって。だから今日は参考になれるかもしれない物を持ってきましたーっ」

ババン！ と効果音がつきそうな勢いで地面に開かれたノートを紹介する。タイトルもなにも記していない古臭いボロノートに近い代物を、ルフィは首を捻りながら指で持ち上げた。

「おれ本読んできると眠っちゃうからわかんねエけどサーヤはわかるんだろ。どんな内容だ？」

「もうっ、ちよつとくらい読む努力しよーよ。えっとね、これはとある海軍の人のメモ帳みたいなものかな。おじいちゃんの部下の人が強くなりたいんなら見てみたらいいんじゃないかなーってくれたんだ」

ガープに様々な書物をおねだりしたら、買い出しを頼まれた部下が本部の倉庫を掃除していたら見つけた物だと言つて譲渡してくれた。どうやら彼も勝手に拝借して自主訓練の参考書に使っていたらしく、もう必要ないからだとのこと。

それでいいのか海軍。まあバレていないのなら良いのだろう、多分。

サーヤの目的は覇気とCP9が持つ技術だ。これでもモンキー一族の端くれなのだから、頑張れば覇気くらい使えるようになるはず。六式に関しては空を歩くことに憧れを抱いているだけで、使えたら便利だよな程度にしか考えていないから然程重要視していない。

サーヤはルフィから本を取り戻し、書きなぐったような文字を楽しげになぞる。

「きちんと読んでみたら日記帳でもあつたから、どうやって強くなつたか参考程度には書いてあるの。興味ない？」

「修業か！」

「あるんだね。じゃあとりあえず今日はそのひとつをやってみよっか」

そう言つと、サーヤはその場で膝を下ろし、服が汚れるのも気にせず正座をした。木刀を横に置き、正面にしゃがむ弟を真剣な面持ちで見据える。サーヤの雰囲気の変化を察したのか、ルフィもまた胡座を搔いて地面に腰を据えた。

近辺に広がる海のさざ波のみが鼓膜を震わせる。サーヤは物静かになる心根に意識を添わせ、つとめて冷静に続きを口にした。

「どう説明したらいいかな……ただがむしゃらに身体を動かすことなら誰だってできる。これはわかる？」

「わかる」

「なら今、わたしたちになにが足りないかわかる？」

「わかんねエ」

潔いくらいの即答だった。しかも胸を張って堂々としているからなおさら質が悪い。

サーヤは柔らかいその頬を思いきり抓った。

「イテツ痛エぞサーヤ！」

「痛くしてるの！ ちょっとは考えないと脳はどんどん退化してくんだからね！」

原作を知る限り、ルフィは馬鹿だけど天才だ。

どのような状況に立とうと、本能的になにがそのとき一番大切であるかピンポイントで把握する。余計な知恵をつけさせては劣化する可能性も無きにしもあらず。

しかしサーヤは思考を放棄することだけは許さない。人間は考え

て考えて考え抜いて文明を発展させた知恵ある生き物だと知っているからだ。

「思い付かなくてもいいからちよつとは考えるの。大人になった時頭がパーだったら困るのはルフィなんだからね」

「んー、わかった。それでなんだっけ」

「わたしたちが強くなるにはなにをすればいいのになって話」

ルフィは眉間にくつきり皺を寄せて唸る。

「サーヤが前に言ってた体力はつけなきゃなんねエのはなんとなくわかった。体力あつたら疲れなくなるんだよな」

「そう、まずはそこからだね。わたしたちまだまだ子供だもん、時間はたつぷりある。けど鍛えすぎたら成長期にあんまり身長伸びなくなっちゃうからほどほどに調整して、そのなかでできることからしないと」

ルフィは噛み砕いて説明を試みるサーヤをじつと見つめる。

サーヤの言う内容は難しくて大半が理解できない。だけど自分達にとって良いことなのだろうということだけはわかる。

サーヤは祖父を除いて、唯一の家族だ。

フーシャ村の皆は優しくて大好きだけど、自分の兄弟だと紹介された少女と見えたそのとき、ルフィはものすごく嬉しかった。朝起きたら出来立てのご飯が並んでいて、昼はくたくたになるまで遊んで、暗くなったら同じ家に帰る。家族だから、年の近い兄弟だからこそ常に一緒にいられるしなんでもできる。

だからルフィはサーヤが将来に向けて取り組む様々な事柄を、二人でやる新しい遊びのような感覚で受け止めている。サーヤがいきなり修行をやると言い出しても、ルフィは反対どころか心が躍るよ

うだった。

要は一緒にいられて、楽しくあればいいのだ。

「そーなのか。うん、わかったぞ」

「その反応わかってないでしょー。ま、いいけど」

知ったかぶるルフィに小さく笑い、サーヤは言った。

兄弟二人の日常風景 前篇（後書き）

2011/11/24 : 改稿版入替

兄弟二人の日常風景 後篇

「わたしたちに今一番必要なのはね、知識はもちろんだけどもにより基礎、地盤が大事だと思うんだ。ルフイにやらせてるのもその一種だよ」

「キソ？ ジバン？」

サーヤは不思議そうな表情を浮かべるルフイに詳細を説明する。

（やっぱり五歳児に難しい言葉を使うべきじゃないよね）

けれどこうして毎度説明する立場になって知ったことなのだが、他人に教えるのは実に難しい。今後、教師なら誰でも尊敬してしまいそうだ。

「んーとね、つまり単純なやり方が一番強くなれるってこと。ルフイのやつてる筋トレをずっと続けていくことが大事ってことかな」
「そっか。ま、おれは強いけどなっ、もっと強くなるんだ！」

今度は理解できたらしく、にかつと歯を見せて笑った。つられてサーヤも笑顔になる。

生前は一人っ子だったため、初めてできた兄弟が可愛くて仕方ない。エースとはまた違った愛情を胸の裡で温めつつ説明を続ける。

「けど動いてばかりもなんだから休憩時間を有効利用……もとい使って修業をするのです。このメモによるとお休み中は頭をからっぽにして周囲、自然の音に耳を澄ませる、身を任せることにより集中力を研ぎ澄ます修業になる……精神統一みたいなものかなあ？ 簡単に言っちゃえば、んー……ここだと海の音色を聞くことだけをし

ようつてことかな、多分」

「せーしんとーいつはわかんねエけど海の音はわかるぞ。今も鳴ってるざざーんって音だよな」

「そうそう。子守唄みたいだけど寝ちゃダメだからね、これは一応修業なんだから」

修業イコール強くなるという暗示らしく、ルフィは異様に聞き分けよく頷いた。

こうして後ほど二人並んで海辺で精神統一とやらを試してみる。所謂、座禅だ。

しかしサーヤは頭をからっぽ状態にする段階から躓き、取り留めないことばかり考えてしまう。これではルフィを怒るに怒れないじゃないか。

（そろそろシャンクス達が現れる時期、か……）

赤髪海賊団。

ルフィの憧れとなる彼等がもうすぐフーシャ村を訪れる——ルフィの物語がはじまってしまう。

サーヤは時期が近づくに比して、恐れに近い感情を抱きつつあった。

原作知識を逆手にとる気満々でいながらも、一方で現実には反映して起こるだろう今後の出来事を目にしてしまうのが怖い。未来を知っていることはそれだけ重い。重すぎる。参考書程度に、と思いつながらも囚われがちに己れが愚かしく感じてしまうほどに。

ただの小娘でしかないサーヤは、それでも虚勢を張って前に進むしかない。

「ぐう」

「……もう、やっぱり寝ちゃった」

すぐ隣で鼻ちようちんを作って眠る弟に気づき、サーヤは考えを中断する。そして頑なになっていた頬をはんなりと緩めた。

座禅ほドルフィに合わない修業スタイルはないだろう。弟は身体で覚え込むタイプだ。

「ルフィ、ほーら起きるんだー」

「っお。あれサーヤ」

鼻ちようちんを指で割るとルフィはすぐさま目を覚ました。キョロキョロと辺りを見渡して不思議そうに後頭部を掻く。

「ルフィにこの修業はダメだね。寝ちやうんだもん」

「そんなことないぞ。おれは寝てたんじゃなくてせーしんとーいつしてたんだ」

「またの名をお昼寝と言う。そろそろお昼だしマキノさんの店に行こつか、なに作ってくれるか楽しみー」

「最近ハサーヤが弁当とか色々作ってくれるからマキノの料理食うの久々だ」

村人達が思っていた以上に、サーヤはしっかりし過ぎる子供だった。

家事をこなした上で三歳下の弟の世話を焼き、大人の手を一切煩わせない様子に、ルフィとはまた違う意味で心配だと言う人達もいる。マキノもそのひとりで、なにかと気にかけていた。

「腹減りグーグー鳴ってるねえ。お昼ご飯はーマツキノさんのりよーりだなー」

「ハラ減ってグーグー鳴ってるぞー。昼メシはマキノのメシなんだ

「」

知らぬは当人達ばかり。

二人は即興の意味不明な歌を披露しながら村に戻る道を進む。しばらくしてフーシャ村の目印である風車が見えたところで、サーヤは異変に気付いた。

「サーヤ、どうした」

「村がいつもより騒がしいみたい。とゆーか、なんか張り詰めてるような……？」

つられて足を止めたルフイは、サーヤの警戒心を滲ませた声色にむうつと唇を引き結ぶ。村の方角を睨みつけるも彼女の言う異変をさっぱり察せられず、「わかんねエ」と降参を表すよう繋いだ手を振った。

「とりあえず行ってみよつか。何事もなければそれでいいし」

「マキノが待ってるしな」

「そーだね」

村の中心辺りまで来れば流石にいつもと様子が違うことに気付いたルフイが、原因らしき場所を指差す。

「あれ、マキノの店じゃねエか？」

古びた看板に『PARTY'S BAR』と書かれたそこには、多くの村人達が入り口を戦々恐々と覗き込んでいた。なかには村長もいて、サーヤは事情を確かめべく駆け寄った。

「村長さん！」

「ん？ おお、ルフィとサーヤか」

困う群れから少し離れた場所で呆れた様子を隠しもせず眺めていた村長は、気難しげな顔をますます深くしてかぶりを振るう。

「もしやお前さんらも野次馬に來たのか。まったくウチの連中と來たら……」

「ううん、みんな騒いでたから氣になつて來たの。なにがあつたの？ みんなマキノさんの店を覗いてるみたいだけど」

嘆かわしいと言わんばかりに帽子を押さえる村長の言葉を否定するとふんと鼻を鳴らされる。

「二時間ほど前に港に海賊船が來たんじゃよ。幸い荒らし回る様子もなく、しばらくここを拠点に東の海を回り^{イースト・ブルー}たいと言つてきよつたから仕方なく許可したんじゃ」

「え……………」

そのとき村長は店に群がる連中を眺めていたため、サーヤの変化に氣付かなかつた。いつも無邪氣な笑顔を浮かべている愛らしい顔が病人のように青ざめ、かたかたと全身を震わせている姿など。

（う、そ……嘘、だつて）

まさかと思つた。

あまりにタイムリー過ぎるだろうとか、ついに來てしまつたとか様々な感情が混じり合い息が詰まる。心構えの出來ていない状態で直面する羽目になるなんて、とことんついていない。

まして彼等に自分の弟が関わらないなんて選択肢は、ない。酒場

に誰が来ているかなんて、原作を知る者なら誰にだってわかる。

「ルフイ、……………えっいない？」

とりあえずルフイに声をかけるが、返事がないことを怪訝に思い振り返る。しかし隣にいたはずの姿がなく、滅多にないくらいうろたえた。

「ル、フィ……………ルフイツ！？」

「お前ら村のヤツじゃねエなっ」

「うえっ？」

店先で求めていた声が聞こえ、嫌な予感を覚えて恐る恐る視線を向ける。

モーゼの如く割れた道の中心に立つは小さな背中。堂々と仁王立ちし店内に向かって指差す姿は勇ましいというより無謀極まりない。そしてそんなことをする人物に心当たりがありすぎた。

「おれはルフイ。フーシャ村にめーわくかけんならぶつとばしてやるから覚悟しろ！」

海賊に喧嘩売つとるー！？

この場にいる皆の心がひとつになった瞬間だった。いち早く我に返ったのはサーヤで、慌てて駆けつけその後頭部を反射的に叩いていた。スパーンと素晴らしくいい音が辺りに響き渡る。

「イテツ痛エぞサーヤ！ なにすんだ！」

涙目で振り返るルフィに対するサーヤも内心では泣きまくりだ。

「なにすんだっじゃない！ もっもう馬鹿、お馬鹿っ初対面の相手に失礼なこと言わないの恥ずかしいじゃないっ。ああすみませーん弟は六歳になったばかりでまだまだ子供で礼儀とかわかんなくて決して悪気があったわけじゃなくてえっとえっと」

そして店内から全力で視線を逸らしながらの弁解は、動揺し過ぎてまともな言葉になっていない。混乱が頂点に達し、じわりと目尻に涙が滲み上がったそのとき。

ふわり、と両脇に手を差し込んで持ち上げられた。

「ふぁ？」

意表を突かれ思考が止まる。一部を除き、周囲も似たようなものだった。

「よし、かろうじて泣いてないな。おれ達は怒ってないから安心しろ」

日差しを遮る麦わら帽子。

白シャツに半ズボン。

なにより鮮やかな赤髪が視界に飛び込み。

（よりにもよって、なんで）

会いたくなかった。

けど、会ってみたかった。

サーヤがなにより怖がっていた大きな存在。

店から出てきた男、赤髪のシャンクスは日だまりのような温かい笑顔を浮かべた。

兄弟二人の日常風景 後篇（後書き）

2011/11/24 : 改稿版入替

赤髪海賊団の滞在（前書き）

改稿やらオフやらでお待たせ致しました。

赤髪海賊団の滞在

店内は稀に見ない活気に満ち溢れ、酒やメシやと注文が殺到している。マキノは忙しく駆けずり回り、彼等の要望に応えるのに必死だ。本来ならばサーヤも手伝いを申し出ていただろう。しかし現状そんな余裕を一切持てなかった。

「ほう、ならサーヤと会ってまだ一ヶ月しか経ってないのか」

「じいちゃんがお前の姉だって連れてきたんだ。それまでサーヤのこと聞いたことなかったけど、じいちゃんが姉ちゃんだって言うならサーヤはおれの姉ちゃんだ」

ウェーブのかかった黒い尻尾を撫でる手つきは無骨な指の持ち主とは思えぬほど丁寧で優しく、小さな身体を膝に乗せている体軀はがっしりしている。家族以外の男の人にこうまで甘やかされるようなスキンシップをはかられた記憶は、前世を含めサーヤにはない。というか家族ですらこんな甘ったるいものじゃなかった。

そのためカチンコチンに固まり縮こまる彼女を余所に、シャンクスとルフィはすっかり打ち解けてカウンター席で仲良く昼食をとっていた。あの挑発的な態度はなんだったのかと真剣に問い詰めたいくらいに。

「サーヤ、ほら口開ける」

と、フォークで綺麗に巻いたカルボナーラを当たり前のように口許に運ばれて、サーヤはますます頑なに首を縮こまらせる。

（うえええーっ シャンクスがシャンクスがシャンクスがああああ）

脳内は既にオーバーヒート気味だ。何故という疑問符ばかりが怒涛の勢いで思考回路を占め尽くしていくばかりでおたつくばかり。

わたしは、なんで、シャンクスの膝の上で、あーんをしてもらっているのでしょうか。

答え、成り行き。

抱え込まれたまま昼食の運びへとなったのだから、そうとしか言いようがない。

「あ、あのですねえ」

「ん、どうした」

鋭い目付きが子供相手だからか柔らかく細まるのを絡まる視線から察し、いたたまれなさから頬が熱くなる。

「えっと、お腹いっぱいなんでもういいです。その、残り全部食べちゃってください」

「ルフイと一緒に昼メシまともに食ってないんだろ？ ちゃんと栄養とらないと成長しねエぞ」

「お頭ア、さつきから見てて思ったんだけど嬢ちゃんに嫌われてんじゃねエのー？」

「バツカ、そんなことねエよ。な、サーヤ」

「あ、はは」

嫌いじゃない、むしろ好ましい部類だけどどう接したらいいのかわかりません。

曖昧にごまかす日本人スキルを存分に発揮し、愛想笑いするサーヤである。

彼等との距離を未だに定められていないために困り果てているだ

け。赤髪海賊団イコール物語のはじまり、重要なターニングポイントに流されるように立ち会ってしまったことに戸惑いを隠せないだけだ。

結局、餌付け行為が止まることなく続けられ、ようやく一段落つきカウンターに戻ったマキノがついと言う感じでくすくすと笑う。そこにはサーヤの珍しく年相応な姿を見れたことによる安堵の意も含まれていた。

「二人とも船長さん達と仲良くなれてよかったわね」

「シャンクスが冒険の話たくさん聞かせてくれるんだって！」

「ルフィがこれだけ楽しそうなところ見れるのは嬉しい、かな」

サーヤはどうあっても女なため、弟の無茶には付き合いきれない範囲がある。だから同性同士、存分に騒げればいいと思う。

「そうか。よしお前ら、今日は飲め！そして長旅の疲れを存分に癒せ！」

『オオーッ！！！！』

兄弟の言葉に気をよくしたシャンクスが仲間に声をかけ、皆もノリノリで酒を浴びるように飲む。いつになく騒々しく開けっ広げで明るい雰囲気引かれて、サーヤもようやく全身の力を抜いた。ぐたーっとシャンクスの身体に遠慮をなくして寄り掛かり、手持ち無沙汰にぶらぶらと足を揺らす。

そんな彼女を目にした近場の席に座る洪い男が、心底可笑しげにくつくつと喉を鳴らした。

「お頭、子猫がようやく尻尾を振りはじめたみたいだぞ？」

副船長、ベン＝ベックマンだ。

「子猫なんてどこにもいねエぞ」

「ルフィ、この場合は言葉の綾ってやつだ。今回はサーヤが子猫だな……それに、懷いたというより緊張がほぐれたただけだろうさ。おれ達は海賊だからな」

正義の使者じゃない。なあに、よくあることだ。
そう笑って言いかけた。

だけどその手は相変わらずサーヤの髪を甘く弄り、年の差がなければ恋人同士の戯れに映るような状況だっただろう。

それを甘受する彼女がどのような感情を抱いているかなんて、この場にいる全員が知るよしもない。

逃避の先に

夕刻の太陽が沈まんとする時刻に帰路につくのはいつものことだ。

その前に狩りを行い、獣道に仕掛けておいた罠の許へ向かい、捕らわれた獣がいればとどめを刺す。いなければそれはそれ、食糧となりそうな獣を探す。

そして住まわせてもらっている対価にそれを手渡して共にありつく。が、現在までもに手料理できる人間が周囲にいないため、捌いて焼いて調味料で味付けするだけのまんまサバイバル料理ばかり食している。かといって、贅沢をして貴族街で高級素材をふんだんに使った料理を口にしたところで満足しないであろう確信があった。

（物足りねエ……）

エースは口内にじわりと溜まる唾を吐き捨て、舌打ちまでしつつも重い足を動かす。

物心ついた時から家庭料理ばかり口にしていた影響下、舌がお袋の味と言わんばかりにしかと馴れ親しんでしまっているのに気付いたのは、ひとりになってから数日後のことである。まさかの非常事態に驚愕した。サボはそんなエースを見て「アイツがいないとダメな身体になっちまったんじゃないねエの」と笑えない冗談をかましてきたので容赦ないラリアットを食らわせた。うん、オレワルクネエ。帰り際に倒した猪をズルズル引きずりながら険しい山道をのぼる。二人がかりで運んでいただけに以前より息切れが激しい。

二人。

一人じゃなくて、二人だ。

会いたいならそつちから来い、と格好つけてみたものの、エース自身八歳のまだまだ子供だ。双子のように生まれ育った片割れがない状況は存外堪えた。しかし同時に悪くないことだともわかつているからこそ、冷静になった頭では認めている。

互いに依存し合う関係はいつか必ず綻びが生じるだろうと、臆けながら理解しているのだ。

サーヤの人生はサーヤのもので、必ずしもエースに倣う必要はないのだと。

「帰ったぞ。今晚のメシは……ぐふっ!？」

「エースウウウウウ!！」

思い直したつも、り――。

家の戸口を乱暴に開いたと同時に、自分より小さな身体が思いきりタツクルしてきた。

そのまま絞め殺す勢いで首に抱き着いてくる人物は、本来ならばこんな隔絶された場所にいるはずがなく、すっかり油断していた。茫然とすること数拍、息苦しさから我に返る。

「ギブ、ギブ……離せサーヤ!」

「ふふーっ、おかえりなさい」

なんとか引きはがして正面から見据えた彼女は、満面の笑顔でエースを迎えた。そんな二人の様子を眺めていた山賊達は、あまりのエースの慌てっぷりに必死で笑いを堪えながらも声をかける。

「エースウ、サーヤの奴おれらにご馳走持つて来てくれたんだ。おめエが持つてきた奴も捌いてうめエの作ってくれるってよオ」
「ホントかつ？　ならキッチンにこれ運ぶ。サーヤ、おれ焼いたのより煮込んだの食いてエ……じゃなくて！」

ここ最近の食卓事情により天秤が一気に食欲に傾きかけたが、エースは理性をフル回転させ努めて険しい顔を作った。

「なんでここにいるんだ。フーシャ村で弟とやらと仲良しこよししてんじゃなかったのかよ」

「えっ、まさかエースったらルフイにまでヤキモチさん？　だいじょーぶっ、エースはエースだからね。それによーやくあっちの生活安定してきたからこれからはたまに足運ぶつもりだよ」

「だからなんでソッチ方向に持つてくんだよ！？　そうじゃなくてだな……」

「うん？」

こてんと首を傾げて見上げてくるつぶらな眼は、相変わらず深みを帯びて不思議と人を引き付ける。天然か意図的かはさておき、人をおちよくるばかりで内心をまったく読ませない頑強な面は容易に崩せないことをエースは知っている。

（こいつ、なにかあつたな）

だけど長年一緒にいたからだろう、野性の勘に近い確信を抱いてその眼差しを見返した。

彼女とじっくり見つめ合うこと数秒、先に折れたのはエースの方だった。

「今日は泊まってくんだろ」

「うん。明日はゴア王国に用事があつて、それ済ませて村に戻る予定」

「ならついてく。だからひとりでふらふらすんなよ」

「りょーかい。じゃあ今日は存分に腕を振るってエースの舌を満足させてあげるねっ」

そしてキッチンまで共同作業で巨大な猪肉を運ぶ。その間、山賊達にやにや厭らしい笑みを浮かべてエースを眺めていることには気付いていた。

（てめエらだつてサーヤがいなくなった時、すげエ落ち込んでたくせにな！）

そう毒づきたくなるが、かえって薙蛇に嵌まる予感がするため無言を貫く。

そのなか素直じゃない筆頭、ダダンだけは笑っていなかった。むしろ敵めしい顔を複雑げに歪めより一層酷い面構えになっており、まるで化け物屋敷に出てくる妖怪じみている。周囲と違う反応だからこそ際立ち、そしてその目が映しているだろっ人物からおおよその見当がつく。

視線の先にいるのは——サーヤだ。

果たしているかどうかはさておき、育て親の役割を与えられていたのだ、なにかしら察せられる要因が見受けられたのだろう。

けどどこで必要以上にお節介を焼かないのがダダンという女でクンババアある。食事中もその後も意味深な視線を時折寄越すだけで行動に移す様子がまったくなかった。さすが甲斐性とは無縁の女だ。いつそ清々しい……いややはり憎たらしい。サーヤもサーヤで追求する隙が忌ま忌ましいくらいに見当たらなかった。

（けど、気のせいじゃねエ）

後片付けを済ませたあとは休むだけで、先に狭い自室に足を運んだエースは硬い床に寝そべりながら結論づける。

サーヤの物で溢れ返っている部屋は、必要最低限しか村へ持ち運ばなかったため以前となんら変わらない生活臭が漂っている。部屋に戻るたびに慣れ親しんだそれに安堵を抱いてしまうのは、いいことか悪いことかエースにはわからない。年に似合わぬ深い溜息が吐き出される。

大人組は酒を片手に歓談中だ。そしてサーヤは酒のツマミ作りに奮闘中。子供らしくない気遣いもいつものこと。

どこがどうちがう、というわけじゃないのだ。あまりに変わりばえがなさすぎて気を抜きそうになってしまう。それでは駄目だ。見逃してはいけない、と頭の片隅ですっと警鐘が鳴り響いているからこそ考える。考える。考えて考えて、頭痛を覚えるほどに今日の様子を幾度と思い返して、

「……………わっかんねエー」

匙を投げ出したい気持ちが湧き上がり、うねる髪を両手で乱暴に掻き回した。

エースはそこらの連中より頭が回る自信があった。やけにマイペースな人物が傍らにいるおかげで周囲に目を向けるだけの余裕も身についているはずだ。しかし昔からサーヤだけは、絡まり合った糸をひとつひとつとき解していくように、慎重に慎重を重ねて観察しなければ察せられないことが多い。

無邪気な顔に騙されるな。

アレは隠し事がとても上手い子猫だ。」

そのことを念頭に入れて挑みかからないと気付けない。気付かせ
てくれない。ある意味根競べの勝負だ。喧嘩や戦闘みたいな単純明
快じゃないだけに厄介すぎる。

「——エース、もう寝た？」

「まだだ。ダダン達の世話は済んだのか？」

と、扉をそつと開けて室内に滑り込む小柄な影。エースは身体を
起こし、目の前にぺたんと座る少女をじつと見据えた。扉の隙間か
ら零れる頼りない明かりがなくとも、暗闇に慣れた目は容易にその
姿を映し出す。

赤を基調とし幾重の色彩を織り交ぜて編んだ紐を解き、後頭部に
ひと纏めに使っていた柔らかな黒髪が暗闇のなか海のように波打ち広
がる。シミひとつない白い肌からはなんとも言えない甘い香りが漂
い、既に寝る準備を済ませたのだと知る。

「うん、終わった。あとは寝るだけだね」

「そうか。いつもとちがうにおいするな、ホシツつてのに関係する
のか？」

「何度も言ってるけど肌の保湿は乙女の最重要事項なんだからー。
それにわたしの肌って母親譲りなのか焼けたら赤くなるんだよねえ。
焼けすぎたら痛いし小まめにケアしないとヒリヒリしちゃうんだよ」

堪えられないほどじゃないけど、と苦笑を零していたサーヤは、
はたと気付いたように両頬を押さえる。

「あつもしかしてこのにおい好きじゃない？ 最近他のも試してみ

てるの、おじいちゃんからお小遣たんまりもらって市販のも買えるようになったから……んー、よくよく考えてみたら贅沢なことしちゃってるのかなあ」

「いーんじゃねエか？ クソジジイの金なんてどんどん使っちゃえばいいさ」

海軍中将なんて地位に就いてるくらいだ、あのジジイに浪費癖はないはずなのでたんまり貯金しているはず。孫の小遣いくらい軽く出せるだろう。

サーヤは幼い時分から美容関係にやけに敏感で、どこから知識を仕入れたのか化粧品を自分で作るほどの執念を燃やしていた。おかげさまでエースも要らないはずの知識を身につけてしまっている。

「そうかなあ、エースがそう言うならそれくらいいいかなあ」

「なあ、サーヤ」

腕組みしてぶつぶつと零す言葉を聞き流し、真剣な表情を作ることで半ば強引に話題を打ち切った。このまま相槌を打っていたらうやもやにされること請け合いだ。というかこのくらいできないと、サーヤの幼馴染なんてやってられない。

エースの変化を感じ取ったのだろう、サーヤは暢気な態度を崩しはしなかったが口を噤み窺うような視線を向けた。

「なーに？ あっこのにおいじゃなくて希望があるなら、」

「なにかあったなら別に言わねエでいい。けど、おれにくらいは甘えろよ」

ぴたりと、あれこれ騒いでいた動きが不自然なほどに止まった。不意をつけたことに奇妙な満足感を覚え、そして更なる確信を得て言葉を続ける。

「サーヤが人一倍頑固で口が堅いのは知ってる。だから、まあ、すつげエ気になるけど言わなくていい、言いたくなかった時にでも言えよ。それよりもひとりで塞ぎ込まれる方がおれは嫌だ」

仮に相手がサーヤ以外なら、エースはしつこく問い詰めていたことだろう。ストレートにしか物を言えないのは思慮分別云々以前に性格だ。

沈黙があたりを支配する。一枚扉向こうの山賊達の下品で粗野な騒がしさに耳を傾けているうちに俯きがちになり、目線を木目の床に落とす。後悔はないけれど頭が冷えていくにつれて、気恥かしさが込み上げてきた。

（なにか言えよ）

これじゃおれの独りよがりな考えを押し付けただけみたいじゃねエか。

頭を抱え込みたい衝動を必死で耐え、引き攣りそうな表情の代わりに口許を固く引き結ぶ。

「……………エース相手だと、嘘をつきたくないから困ったな」

そしてエースの限界値が試されんとしていたそのとき、酷く物静かな声音が室内に響いた。

「本当に、困った」

普段の間延びした口調が改まり、年齢不相応な冷静さを帯びた声

色で眩かれたそれ。

たったそれだけの落差でサーヤという人物がただの子供じゃない事実を浮き彫りにする。落ち着き払いながらも陰掛かった眼差しが、エースの心までも一瞬にして驚掴みにした。奥底の見えない深い、深い、深過ぎる眼が、途方にくれて剥き出しになった幼さに否応なしに惹き付けられる。

このときエースは、生まれて初めて少女の心根に潜む闇に触れた。

所詮、子供にできることなど高が知れている。エースは身動きひとつできず、ただただ固まるだけの木偶の坊と化した。

一方、サーヤの中身はとうに二十歳を超えたいい大人である。いかに精神的余裕がなくとも、子供に氣遣わせるほど落ちぶれてはいない。しかし——片割れに告げられた、甘えろという言葉はあまりに魅力的で、いとも簡単に心を揺さぶられたのも事実。

サーヤは口内で吐露するべき言葉を探し、選び、そして弱々しげに囁いた。沈黙を守る選択肢は端から思いつかなかった。

「……言え、ない。言えないの。これは、これだけは誰かに頼れるものじゃなくて、わたしの脆弱な精神のせいってわかってる、から」

どれだけ願おうと一瞬の猶予もなく時計の針は進んでいく。確実に迫ってきている未来に心が押し潰されそうで、だけど誰にも言えるはずがなく溜め込んでいく。シャンクス達というキーパーソンに出会い、その温かさに触れて恐怖が倍增した。ただそれだけのこと。

そして途方のない孤独感に襲われたのだ。

モンキー・D・サーヤはこの世界の異分子であると。

それを埋めんと様々な視点で足掻かんとし、なにより人との繋がりを大事にする姿勢を心掛けてきた。だけど結局のところ、誰ひとりとして理解を求められず、時折虚しさが込み上げる。

いっそ開き直ればなんの苦もなく過ごせただろう。自分はこの世界の住民であると。原作知識は付属品に過ぎないと。しかしこればかりは性分というべきか、改善しようにもどうしようもない。

だから逃げた。一時でもいいから抛り所である彼の傍らに戻ってきた。荒れた心の整理をしに、この世界の实家といえる家に帰ってきたのだ。

そして今、最も心を許せる存在が手を差し伸べている。

「でも、ね。それでもいいなら、」

サーヤは恐る恐る、いつもなら躊躇なく伸ばすであろう小さな手を、エースの膝にそっと置いた。そうして泣き声かと勘違いしてしまっただけに掠れきった声で、互いが妥協できるライン上、精一杯の願いを口にする。

——エース、ぎゅってして。

瞬間、サーヤを襲ったのは息苦しいほどの抱擁だった。強張る身体が弛緩して、そう体格の変わらない肩口に顔を埋める。子供特有の熱い体温に触れて安堵の吐息が零れ落ちた。

そんなサーヤを抱き寄せるエースは、己れの不甲斐無さに顔を歪めながらも、決してその腕を緩めなかった。躊躇なく小さな後頭部に腕を回したのは本能に近く、そうじゃなければ未だに固まっていたま

までいただろう。それを自覚していたからこそ、ささやか過ぎる願いくらいは叶えてあげたいと思う。

（クソッ いざという時にこれかよ。クソ、クソッ、クソ…・…ッ
ッ
！！！！）

今の自分では、サーヤが背負うすべてを包み込むことは不可能だと悟ってしまった。悟らざるを得なかった。

幼い頃から気になっている、深遠な眼差し of 正体を知りたかった。そして彼女の人格を形作る根本に触れる機会をようやく得たというのに、掛ける言葉すら見当たらない自分に愕然とする。二桁にも及ばない人生しか歩んでいない若輩に荷が重過ぎるのだが、生憎とエースは気付かない。ただ再びこのような機会に恵まれたとしても、同じ反応を返してしまう確信を得てしまった。

指を通すとひんやりとして、だけど柔らかな髪を撫でる。密着した身体からは蜂蜜のように甘ったるい芳香が鼻腔を擦る。慣れないにおいだ。知らない人間を腕に囲っているみたいで、落ち着かなくてむずむずする。

段々と思いがずれていき香りに意識が囚われがちになりつつあるのを察したのか、サーヤが顔を埋めたまま名前を呼んできた。

「エース。ど、したの」

「……やっぱり甘ったるすぎて駄目だ。臭エ」

「えっ嘘!？」

無意識下で真っ正直に答えてしまった感想があまりにショックだったのか、サーヤが顔を上げた。

「お」

「あ」

そして二人の視線が絡み合い、目をしばたかせる。シリアスな空気は、場の空気を読まない発言ですっかり霧散していた。数秒の沈黙の後、どちらからともなく吹き出す。

「ふふっ失礼しちゃうなあ。じゃあどんなにおいしいの？」

「市販の買いはじめる前に使ってたやつがいいな。一番しつくりくる」

からりとした爽やかさにほのかな甘さが混じり合う、太陽の残り香のようなそれ。慣れ親しんだ香りというのもあるが、サーヤに馴染み過ぎるほど合っていた。

腰に回されている手がエースの服をくいと引つ張る。それを肯定ととり、ほっと吐息を零した。間近でくすぐすと声をたてて笑う姿は、普段の朗らかなそれで、ひどく安心した。

「……ほんと、エースは将来ジゴロ道一直線だねえ」

「だからジゴロの意味わかんねエって」

「んー、男の人には名誉な称号、かも？」

「なんだそれ」

囁くように紡がれる会話は取り留めのない内容で、けれど互いに心穏やかになっていくのを感じ取る。シリアスになりきれない二人は、顔を見合わせて笑い合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1777v/>

ONE PIECE 世界を巡る

2011年12月7日02時47分発行